室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

徳島方言における「ダロ」「ダー」「デ」「デー」について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2020-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): sentence-closing particle, supposition, interrogation, inference, request for confirmation 作成者: 島田, 武 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/00010174

室工大紀要第 69 号（2020）71～76

学　術　論　文

徳島方言における「ダロ」「ダー」「デ」「デー」について

島田　武[*1]

（原稿受付日　令和元年 7 月 2 日　　論文受理日　令和 2 年 2 月 20 日）

On "Daro", "Daa", "De", and "Dee" in the Tokushima dialect

Takeshi SHIMADA

(Received 2nd July 2019, Accepted 20th February 2020)

Abstract

This paper aims to describe the functional characteristics of four sentence-closing particles,"daro", "daa", "de", and "dee" in the dialect of Tokushima spoken in the eastern part of Shikoku, which is one of the four main islands of Japan. "Daro" has the function of supposition. "Daa" is an allomorph of "daro", which stands for inference and the request to agree to it. "De" has three functions: interrogation, presumption, and emphasis. "Dee" expresses the request for confirmation.

Keywords : sentence-closing particle, supposition, interrogation, inference, request for confirmation

1　はじめに

日本語を特徴付けている要素のひとつに、文末に生じる表現がある。それらは会話の中で、疑問、強調、同意、断定、推量など話者の感情や態度を表す。例えば、「明日の天気は？」と聞かれた時、以下のように答えることができる。

(1) 雨だ　　／　晴れる
(2) 雨だよ　／　晴れるよ
(3) 雨だね　／　晴れるね

通常の会話では、(1)のような発話をすることはまれで、(2)の「よ」や(3)の「ね」のような表現をつけるのが普通である。これらの表現は文末詞[(1)]と呼ばれ、文の最後に付加されることによって様々な機能を表すことができる。

同様のことが日本各地の方言でも見られ、いわゆる「方言らしさ」を醸し出す。また共通語には見られないような、形式のわずかな違いとそれに応じた機能の区別を発達させていることがある。本稿ではその一例として、徳島方言で観察される文末詞のうち、推量を表す「ダロ」「ダー」と疑問、強調などを表す「デ」「デー」について、記述を行う。

[*1]　室蘭工業大学　ひと文化系領域

2　徳島方言の地理的区画

徳島県は四国の東側に位置する県で、北に香川県、南に高知県、西に愛媛県と接している。その地理的位置から関西圏とのつながりが強く、その方言も全県的に近畿方言と共通している特徴を持つと言われるが、森 (1982) の区分によると、上郡（かみごおり）、下郡（しもごおり）、うわて、海部（かいふ）、山分（さんぶん）の 5 区画[(2)]に分けられ、図 1[*2]のようになる。今回取り上げる方言は、下郡と呼ばれる地域の中でも北東側に当たる、鳴門市と北島町、藍住町、松茂町などで話されているものである。

図 1　徳島県の方言区画

3　徳島方言の文末詞「ダロ」「ダー」「デ」「デー」

3. 1. 文末詞「ダロ」

徳島方言には、断定辞「ジャ」の推量形または「推量」の文末表現として「ダロ（ー）」[(3)(4)(5)]が存在する。頻度としては「ダロ（ー）」が優勢だが、世代によっては元の断定辞「ジャ」の音形が残り、「ジャロ（ー）」と発話されたり、時に近畿方言のように「ヤロ（ー）」と発音されたりすることもある。上野(1997)から例を挙げる[(3)]。

(4) ホラホーダロ／ジャロ／ヤロ（それはそうだろう）
(5) イクダロ／ジャロ／ヤロ　　（行くだろう）
(6) イッタダロー／ジャロー／ヤロー（行っただろう）
(7) カカンダロ／ジャロ／ヤロ　（書かないだろう）
(8) カカンカッタダロ／ジャロ／ヤロ（書かなかっただろう）

3. 2. 文末詞「ダー」

上記の「ダロ（ー）」に類似した表現に「ダー」という文末詞[(3)]がある。上記(4)-(8)は以下の(9)-(13)のように「ダー」を用いて言い換えられる。しかし、「ダロ（ー）」が「ジャロ（ー）」と言い換え可能な場合があるのと対照的に、「ダー」は「ジャー」を用いて言い換えることはできない[*3]。

(9)　ホラホーダー　　／　*ホラホージャー[*4]　cf.　ホラホージャロ
(10) イクダー　　／　*イクジャー　　cf.　イクジャロ
(11) イッタダー　　／　*イッタジャー　　cf.　イッタジャロ
(12) カカンダー　　／　*カカンジャー　　cf.　カカンジャロ
(13) カカンカッタダー／　*カカンカッタジャー cf.　カカンカッタジャロ

この言い換えができないことから、「ダー」は断定辞「ジャ」から独立して文末詞として分化しつつあると考えられる。

---

*2　図 1 は上野 (1997:2)[(3)] から引用し鳴門市の位置を加えたものである。図中の海部は灘とも呼ばれる。鳴門市、北島町、藍住町、松茂町の位置は付録を参照。
3　例の先頭に付されている「」は実際には現れない例であることを表す。
*4　「ホラホージャー」という形式は「それはそうだ」の意味の時は実在するが、その場合は「ジャー」は断定を表し、推量は表さない。

加えて言い換え可能な「ダロ（ー）」と「ダー」にも、音調[*5]と機能に違いがある。「ダロ（ー）」の音調は、(14)のように前の要素に続いて「LL（L）」として発話されて「推量」のみを表す場合と、(15)のように「LH」（「ダロー」の場合は「LLH」）として発話されて「推量＋疑問」を表す場合とがある。一方「ダー」の場合は、(16)のように音調は常に「HL」になり「推量」と話し相手への「同意要求」を表す。

(14) オナカガスイタラ、タベルダロ　（おなかが空けば、食べるだろう）＜推量＞
LLHLL
(15) オナカガスイタラ、タベルダロ？（おなかが空けば、食べるだろう？）＜推量＋疑問＞
LLHLH
(16) オナカガスイタラ、タベルダー　（おなかが空けば、（きっと）食べるよね）
LLLHL　＜推量＋同意要求＞

上記の(14)と(16)はどちらも「推量」を含んでいるが、(16)は話し相手の存在と同意が前提になっているので、独り言で使用できるのは(14)のみであり(16)は使用できない。同様の理由で、天気予報を伝えるときに用いられるのは「ダロ」のみである。

3. 3. 文末詞「デ」と「デー」

文末詞「デ」と「デー」は徳島方言に特徴的であると言われている[(6)]。さらに先行研究でも、様々な意味、機能を表すとされている[(3)(4)(7)(8)]。例として鳴門市で採集された例を挙げる[(9)]。

(17) ナンニツカウンデ？　（何に使うのですか？）
(18) モウジキクルデ　（もうすぐ来ますよ）
(19) サーットオッテクルデ。　（サーッと追って来るのよ。）
(20) モノスゴイナンジェンニンモシンドンデ　（ものすごく何千人もの［人々が］死んでしまったのだ。）

硲口、岸江、仙波、久保、坂田(2017)によると、各例文の機能は、(17)は疑問、(18)は確信を持って意志を告げる、(19)と(20)は「～ではないか」という同意を求めるとされている。これら以外の機能としては、詰問、勧誘、強調[(3)]が挙げられ、さらに上昇や下降の音調が現れるとされている。また疑問を表す場合は丁寧な言い方になるという[(4)]。

このように文末詞「デ」と「デー」に関しては様々な機能と音調があるとされているので、以下では機能ごとにいくつかの例を挙げてみる。なお「デ」は「デー」とも発話されるが（例：ナンニツカウンデー？）、以下では「デ」で代表させることとする。

3. 3. 1. 疑問の「デ」

まずは疑問を表す「デ」の例を挙げる。「デ」の付く要素のみを見るために状況を表す部分を括弧に入れて提示する。

	状況	例	音調	対応する意味
(21)	（探しているのは）	コレデ？	HHH	（これ？）
(22)	（吠えているのは）	イヌデ？	HLH	（イヌ？）
(23)	（痛いのは）	カタデ？	LLH	（肩？）
(24)	（当たると死ぬのは）	フグーデ？	LHLH	（フグ？）

*5 本稿の音調の表記はカナ 1 文字に当たるモーラの高さの発音が高い場合は「H」、低い場合は「L」とする。また音節内の上昇「R」や下降「F」は、簡易的に「LH」と「HL」とし、長音として発音されていることを示す。

(25)	（お菓子）	イルデ？	HHH	（要る？）
(26)	（テレビ）	ミルデ？	LLH	（見る？）
(27)	（もう荷物は）	キタデ？	HLH	（来た？）
(28)	（捜し物は）	ナンデ？	LLH	（何かな？）
(29)	（うるさいのは）	ダレデ？	HHH	（誰かな？）

上記の(21)から(24)を見ると、疑問の「デ」は前にある要素の音調にかかわらず音調が常に「H」で現れている。また(24)の例からは、近年の徳島方言では基本的に実現しないといわれている[9]、いわゆる拍内下降が「デ」の前で「フグー　LHL」のように復活しているように見える。これらの例の中には、(25)や(26)のように勧誘と解釈できる例も含まれていることが分かる。

疑問の「デ」は、先行研究で「丁寧」と記述される[4]ことが多いが、それは「デ」の代わりに、疑問の文末詞「カ」が使用されたときと比較すると、幾分語気が柔らかぐことによると思われる。それはちょうど共通語で、「これ？」と「これか？」のペアのように、疑問の「カ」をつけたときとつけないときの語気、または「これかな？」や「これかい？」に対する「これか？」の語気の差に相当する*6。この語気の緩和から勧誘の解釈も生じると考えることができる。

3. 3. 2. 推定判断の「デ」

次に(18)のような「確信を持って意志を告げる」とされている「デ」の例を見る。

	状況	例	音調	対応する意味	
(30)	（バスはもうすぐ）	クルデ	LLH	（（心配しなくても）来るよ。）	= (18)
(31)	（言われなくても自分で）	スルデ	HHH	（きっとするよ。）	
(32)	（そんな馬鹿なこと）	セーヘンデ	HLLLH	（きっとしないよ。）	

上記の(30)から(32)は動詞または助動詞に「デ」が付加されて、話者の推定判断を表す。この場合の「デ」は、前にある要素の音調にかかわらず「H」の音調を持つ。したがって 3. 3. 1 節の疑問を表す「デ」と同じ音調になるので、機能の区別は文脈に依存する。

3. 3. 3. 推定判断の強調の「デ」

3. 2. 2 節の例文の音調だけが違う形式で、推定判断の強調を表し、話し相手への何らかの働きかけをすることができる。

	状況	例	音調	対応する意味
(33)	（バスはもうすぐ）	クルデ	LHL	（来るよ。急いで／安心して。）
(34)	（言われなくても自分で）	スルデ	HHL	（するよ。口出ししないで。）
(35)	（そんな馬鹿なこと）	セーヘンデ	HLLHL	（しないよ。口出ししないで。）

この機能を持つ「デ」は従来「詰問」と呼ばれていたものを含み、「L」の音調を持つ。したがって疑問の「デ」とははっきりと区別して発話することができる。

---

*6　疑問の「カ」に関連する例として、通常話し相手に対する問いかけとして、疑問詞に「カ」のみをつけた形式は共通語では許容しにくい。例えば「お前誰だ」とは言えても「*お前誰か」とは言えない。

i.	*誰か？	誰だ？	誰？	／	誰だい？	／	誰かな？	など
ii	*ダレカ？	ダレジャ？	ダレ？	／	ダレデ？	／	ダレカイナ？	など

その場合は(i)のように断定の「だ」を使う、「か」を使わない、または「だい」「かな」のような文末詞をつけた言い方になる。それに対応する徳島方言(ii)を見ると、「だ」に対応するのは「ジャ」であり、疑問辞を用いないのは共通である。さらに語気を緩和する文末表現に対応するもののひとつとして「デ」があることになる。

3. 3. 4. 確認要求の「デー」

「デー」には話し相手に対して確認を要求する機能を持つ用法がある。

	状況	例	音調	対応する意味
(36)	（早く行かないと）	ソンデー	HLLL HLHL	（損じゃないか）
(37)	（100 点取るなんて）	ゴッツイデー	HHLLLL HHLLHL	（すごいじゃないか）
(38)	（欲しがっていたのは）	コレデー	HHHL	（これじゃないか）

確認要求の「デー」には(36)や(37)のように音調が 2 種類あり、「デー(HL)」と「デー（LL）」となるが、(38)のように「H」に後続する「デー」に「HL」の音調しかないことを考えると、基本は「デー(HL)」であり、それが弱まったものが「デー（LL）」となると考えられる。また「デー(HL)」と「デー（LL）」は基本的には長く発音されるが、常に長い「デー(HL)」と比較すると「デー（LL）」は短めに発音されることがある。

4　結語

本稿では徳島方言に見られる文末詞の「ダロ」「ダー」「デ」「デー」について主に機能と音調に関して記述を行った。その結果は以下のようになる。

	項目	機能	音調
(39)	ダロ（ー）	推量	LL～LLL
(40)	ダロ（ー）？	推量＋疑問	LH～LLH
(41)	ダー	推量＋同意要求	HL
(42)	デ（ー）	疑問	H
(43)	デ（ー）	推定判断	H
(44)	デ（ー）	推定判断の強調	L
(45)	デー	確認要求	HL～LL

「ダロ」と「ダー」に関しては機能と音調が 1 対 1 で対応しているのに対し、「デ」と「デー」に関しては、(42)の「疑問」と(43)の「推定判断」が同じ「H」であることと、同じ「推定判断」でも(43)と(44)のように「強調」が加わると音調が異なっていることが判明した。また(41)の「ダー」と(45)の「デー」は話し相手に対して「同意要求」や「確認要求」をする機能を有し、音調も「HL」を共通に持つことが観察された。この二つはちょうど「確認要求」を表す共通語の「だろう」と「じゃないか」(10)に対応するもので、今後は「確認要求」という談話機能を軸に対照研究を行うことも視野に入れて調査を行うことが重要である。

文献

(1) 藤原与一 (1986)『方言文末詞<文末助詞>の研究（上）』（昭和日本語方言の総合的研究第三巻）春陽堂
(2) 森重幸 (1982)「徳島県の方言」『講座方言学 11 中国四国地方の方言』国書刊行会
(3) 上野和昭 (1997)「総論」平山輝男編著『徳島県のことば』p1-28, 明治書院
(4) 川島信夫・金沢浩生 (1996) 「北島町の方言」 阿波学会紀要 42（総合学術調査報告　北島町）
https://library.tokushima-ec.ed.jp/digital/webkiyou/42/4224.html　2019 年 6 月 29 日閲覧

(5) 仙波光明 (2006)「藍住町の方言」『阿波学会紀要』52, p157-166.
(6) 金沢治（1961)『阿波言葉の語法』徳島市中央公民館付属図書館
(7) 上野智子 (1984) 「阿波方言の文末詞デ(一)」『方言研究年報』26, p41～59.
(8) 村田真実 (2016)「徳島方言における文末詞「デ」の音調と機能－徳島市及び近隣地域を中心に－」『音声言語』Ⅶ p65-76.
(9) 硲口有香子、岸江信介、仙波光明、久保博雅、坂田千春 (2017)「鳴門市の方言」『阿波学会紀要』61, p149-160.
(10) 宮崎 和人 (1996)「確認要求表現と談話構造--「～ダロウ」と「～ジャナイカ」の比較」『岡山大学文学部紀要』25, p107-120.

付録：徳島県市町村地図による鳴門市、北島町、藍住町、松茂町の位置

フリー素材の「徳島県の地図（Word／ワード）https://www.digipot.net/?p=20909」から作成